

# 危機の中で精神の平衡を保とう

新型コロナウイルスに私どもはもう2年以上もさらされてつづけている。第7波の見通しも不透明らしい。まだしばらくは気鬱な日常生活を余儀なくされるのであろう。ロシアによるウクライナ侵攻の、映画のフィルムリールを七十数年前に逆回したかのような、正視に耐えない凄惨な画像を毎日のようにテレビや新聞でみせつけられていく。この戦争にもわがには終熄しまい。

## 山頭火が再ブームに

不安障害や強迫神経症に悩まされる人々が、子供を含めて相当数発生しているといわれる。無理もないことだと思う。特段の症状をもたない人々であっても、いつもとはちがう抑鬱的な気分を漠然と感じながら日々を過ごしているのではないか。私自身がそうだ。精神の平衡を保ちながら毎日を何とか凌いでいきたいものだと思つてく思う。

## 種田山頭火がちょっとしたブームになつて

種田山頭火がちょっとしたブームになつて、と山頭火研究の第一人者から聞かされた。関連本を売れ行きもいいという。そうい

# 正論



拓殖大学顧問  
渡辺 利夫

## 心の苦しさを「代償」

私は不安や抑鬱の時には、書架から山頭火の句集を取り出し、付箋のついたページを開き傍線の引いてある句に目をやり、心の中でこれを繰り返す。墨染の法衣、網代笠、右手に杖をもつて静かに歩く山頭火の後ろ姿が目の中に浮かんできて、私の心はいつの間にか、ほつと癒やされている。生死の中の雪ふりしきるしづけさは死ぬるばかりの水が流れて

いつまでも死ねないからだの爪をきる。

炎天をいたたいて乞ひ歩く人間のどうしようもない寂しさと悲しみを歌うこれらの句には、私どものつらい気分を慰撫する効用が確かにある。山頭火の句は私どもの心の苦しさを「代償」してくれているのであろうか。「代理苦」という表現がある。煩惱に捉えられ悟りの境地に至ることなど到底できない凡夫の苦しみを私どもにかわって引き受けてくれる菩薩の行の一つだといふ。

## 心を慰めてくれる何か

1990年代初期のバブル崩壊の頃、山頭火ブームが到来したことがあった。関連する著作が出版され、テレビでドラマ化されたりもした。欲も得もなく、ただ漂泊に身を任せ、生きて在ることの物寂しさを吐息のように漏らしながら歩く山頭火は、不況下で苦しむ人々の放浪願望をわずかではあれ満たしてくれたのではないか。心理学でいう「代償行動」をやってくれる人物が山頭火だったので

朝鮮で終戦を迎えた五木寛之氏のつらい日常を支えてくれたのは「湖畔の宿」とか「サーカスの唄」とか「赤城の子守唄」とかいふ。当時の歌謡曲だったといふ。「悲しい時には悲しい歌を」という氏のエッセイの中にそうある。コロナ禍にあって人々を元気づけようと「上を向いて歩こう」があちこちのテレビなどで歌われていたが、今はもうやっていない。やっぱり五木ひろしや八代亜紀のような名手の歌う「演歌の花道」などの番組の方に引き寄せられてしまふ。

ないか。山頭火の句には、バブル崩壊期、このコロナ禍やウクライナ戦争で胸を塞がれて毎日を過ごす私どもの心を慰めてくれる何かがある。唯も知っている尾崎放哉の自由律句である。学歴エリート之道を駆け落ち、不治の病を抱えて朝鮮、満州、京都、神戸、若狭、小豆島を転々、引きずる死の影を清澄に歌い上げたもう一人の句人が放哉である。修辞のすべてを濾過し、わずかに残る七文字だけで人間のどうしようもない寂しさと人生の深い悲しみを表現するこの才能の高さには、驚嘆すべきものがある。胸の奥の空洞、乾いて攻め上がる痛み、近づきつつある死への惻々たる思いをこの七字は隠し持っている。

コロナ禍、ウクライナの惨状に心を深く痛めつけられつつも、精神の平衡を保ちたい。「悲しい時には悲しい歌を」か。この機会に山頭火と放哉をもう少し本気で読み込んでみようか。(わたなべ としお)